

『浮世物語』における

主人公の機能と巻第二の断層

松本 健

一、はじめに

『浮世物語』をめぐる先行研究の多くは、前半から後半への流れにおいて見られる様相の変化に注目している。『浮世物語』をはじめ、矮小滑稽に設定された主人公の批判されるべき振る舞いを描くハナシが展開されているのだが、ある時から主人公には批判をする側の性格が付与されるようになり、巻第三では主に政道批判を語り、巻第四以降は主に知足安分の生活を訴えることになる。しかしながら実のところ、巻第三で主張していたのは、それらの分裂性ではなく一貫性であった。もちろん、分裂しているように見えるものに対して、その分裂性を語るより一貫性を語る方が有意義な作業のように思われるのであるが、『浮世物語』についていえば、その方向性は首肯しがたい。

野田寿雄氏は『浮世物語』^{〔1〕}「覚書」において、

……浮世房の造型が、たしかに粹狂と高潔とに分裂しているかのごとき印象を与えるけれども、それは決して分裂しているのではなく、作者の内面においては意外に統一されたものであったと見るべきであろう。博奕傾城にうち上げられた浮世房が、一方に主君に対して人偏の道を説くのは、矛盾といえは矛盾であるが、この作において浮世房ははじめから自由人として約束されているのであるから、ある意味で彼は超人的な神としての待遇を受けているのである。神である以上、変転自在は決して不思議ではないのである。

と述べていた。「自由人」や「神」ほどのわかりやすい言葉を使わずとも、先学の多くが主張していたのは、さまざまなものを超越できる性格があらかじめ備わっていたということである。そして、それを導きやすくしていたのは「浮世」という言葉の持つイメージの広がりであったと思われる。「浮世物語」を対象とする限りこのような論理立ては通りやすい道筋であった。確かに変転自在が許される土壌はあったといえる。しかし注意しなければならないのは、全ての変転が作者の予定していたものであったとは限らないということである。浮世房を神と見なすと同時に浅井了意にも揺るぎない構成能力を認め、全てが予定通りに語られ尽くしたとするのでなければ、先ずは変化は変化として認め、その理由をこそ探るべきではないだろうか。一貫性を主張する論考の存在自体が、変化という現象の存在を証明している。前後半それぞれの語られ方の特徴を見極めることによって、結果としてどこまでが作者の当初の予定に沿うものであったのかということが、明らかに becoming していくと思われる。

二、主人公の設定

浅井了意は『堪忍記』や『可笑記評判』などで教訓・啓蒙を盛んに書いてきたわけだが、『浮世物語』の中にもやはりそのような箇所を多く認めることができる。そうなるとこれらは同じような動機、つまりそのようなものを語りたいという欲求から成立した部分が多かったと判断することができる。それではなぜ『浮世物語』はこのように主人公のいる物語の形態をとって語られていたのか。そのことに注意しながらこの物語を読みはじめてみたい。

浮世房の登場において特徴的なのは、先ずは父親の性格設定から語られていることである。「追従らしきへつらひ者」、「余勢の音信物（権威がらみの賄賂）をとる事山のごとし」、「国中無双の臆病者」と、万人にとつての軽蔑すべき要素をもって固められているのだが、これはなぜなのだろうか。「王朝物語の主人公のありようを徹底的に逆転」という評価が一般的なのかもしれないが、滑稽さだけではなく、啓蒙・教訓を目的とした唱導という観点から見ると、もっと直接的に重要な役割を果たしていることに気づくことができる。

それは唱導に利用するための主人公を登場させる際の工夫であり、考慮されていたのは読者が感じる主人公との距離感

であつた。この設定によつて父親は、どのよ、な読者にとつても決して「自分の側」の人間とは見なせない存在となつていた。そしてもちろん父親の紹介によつてこの物語の主人公も、本人の紹介より前からどのような読者にとつても、先ずは自分とは距離のある「向こう側」の人間として印象づけられていたといえる。ここにこそ注目点があつた。読者に「自分の側」の人間と思われてしまつては果たすことのできない機能が、この主人公には期待されていたからである。

浮世房自身についてはこの後で、「居合・柔・兵法など、おさなきより手馴れさせ、すこしは字がしらをも読みわかるやうにもあれかしと、寺にあげて手習ひをさせられども、芸能の方はことのほかに不器用なり」といつた性格が紹介されることになるのだが、当然先ほどの印象が影響するためここでこの主人公を自分に重ね合わせる読者はいるはずもない。しかし冷静に見てみれば、実際には浮世房のこの性格はそれほど特別なものではなかつた。条件だけでは充分に多くの読者にあてはまるものだったのである。つまりここで起こつていたのは、いわば超人的に彼岸に存在する父親の印象に引つ張られ、彼岸にいるような錯覚を持たせてしまう主人公を、実は此岸に人間として生み落としていたということである。主人公との間には距離があるように思ひ込んでいた読者が、やがてはそれが錯覚であつたことに気づく。

父親を利用した二段階の性格紹介は、実際には読者にとつて身近で現実的な行いをさせることになる主人公に、心おきなく嘲笑的・批判的視線を向けさせておくための周到な仕掛けであつた。このような仕掛けが意味を持つことになる事態は、次の場面から早速あらわれる。主人公（この時の名は飄太郎）は、博奕に溺れて負け続ける。その時の醜態は、

……銭の中に銀をまじへ、銀の下に金をしきつ、立ててはとられ、積みてはとられ、夜ごとに寄り合ひて打つほどに、負くる事かぎりなし。後には叱り博奕になり、喧嘩まなこになりつつ赤面しける有りさま、世にある人はすまじき事なり。見ぐるしさ、いふばかりなし。

と描かれていた。次第に大きな金額を賭けるようになり、切羽詰まつて遂には喧嘩ごしになつていく様子が、決して飛躍した表現に頼ることなく、活写されている。「向こう側」にいる主人公の荒唐・滑稽なありさまのような印象で読まれながらも、実際にはこのように博奕に溺れる様子は、読者にとつて自らや自らの周囲に覚えのある事態だつたと考えられる。鼻先に突きつけられれば煙たく思う戒めであろうが、「向こう側」の見苦しい事態を笑うことを經由しての自戒としてな

らば、それぞれの読者に届く内容だったのでないだろうか。

つまり了意がこれまで書いてきたものと同じように、戒めを語りたかったという動機は変わらぬまま、それをより効果的に伝えるために方法を工夫していたということである。

続く場面でも同じようにこの仕掛けが意味を持つ。主人公は高原に通い詰めて身を持ち崩す。その時の醜態は、

……やがて揚屋の中うち階かひにかけあがり、日比知音の太夫に逢あひて、ある時は口舌くせつをしいだし、大いに振られて馬をつなぎ、又ある時は、「後の世あとのよまで」とかたらはれて、命を塵ちりとも思はず、太鼓衆たいこむねにうちはやされて、鼻はなの先さきうぞやき、うごく／＼として笑ひどよめき、日ごとに通ふほどに、金銀をつかふ事水のごとく、……

と描かれていた。ここにも飛躍した表現は使われていない。太夫の手練手管に気づかず夢中になってしまふ愚かさ、外から見ればよくわかる。騙だまされているなどと他人から忠告されても聞く耳は持たなかつただろうが、滑稽なへ向むかう側の人間を笑う内に、自らの覚えに行き当たることもあり得よう。真の情を通わせていたつもりが、本当は典型的な太夫の常套手法に乗せられていただけと気づくのなら、この戒めは実に効果の高い方法で語られていたといえる。

教訓が教訓らしからぬ回路で届けられることの有効性ということのみでいえば、これまでも指摘があつた。常吉幸子氏は「了意における〈批判〉の特性——『浮世物語』への視角における『可笑記評判』論——」において、

御立派な夜郎自大の教訓などに誰が好んで耳を傾けるだろうか。このように自己を滑稽化し卑下することによって、當時人は進んで関心を示し話を聞いてくれたにちがいない。(中略) ……はじめから教訓的に語りかけられる『可笑記』よりも、まずその享楽性を徹底して発現し、やがて身は愚劣なりに教訓する次善の段階へ、さらに浮世房型の理想的人格へと、一つの人格の成長の過程として示される『浮世物語』の方が、比較するならば、どれほど読者の関心をひき説得力をもつかは言うまでもなく明らかであろう。『可笑記』から『浮世物語』への組み替えと変容は、より教訓・批判の有効性を求めたより高次の文芸社への移行だったのである。

と述べている。しかし稿者が訴えたいのは、「人格の成長の過程」などを待つものではなく、前半のみで完結し得る教訓の有効性である。ここでは、読者にとつての身近な自省点を他者のこととして見せるという特別な方法がとられていた。そのため主人公の現実的な行動を父親の特異な印象に重ねたまま描くという工夫がなされていたのである。実のところこの方法は後半まで及ぶものではない。つまり巻第一の二「浮世房なりたちの事」で詳細に設定された主人公の性格が意味を持つ範囲と持たない範囲とに分けられるということである。これが『浮世物語』に断層を認める確かな手掛かりとなると思われるのだが、それはまた後に述べるとして、先ずはこのような方法に用語を与えてみたい。

三、反治のための物語構想

如儡子による『可笑記』巻第二の七に、

……かゝるうき世にすみながら、行儀たゞしく心真にしては、みな人きづかひ、むつかしがりて近よらず、近よらざれば親しむ事なし。親しまざれば其悪を除き、此善をすゝめがたし。爰に本反の療治あり、たとへば内熱を冷まさんとて、冷薬を用る事、これ本治なり。しかれども、焼け石に水をかくる如くにて、冷めかぬる時は、右の冷薬の内へ、熱薬を一味加へて用る時には、熱かならず冷むるなり。これ反治なり。

という件がある。これに対して了意は『可笑記評判』巻第三の七において、

……今の世は、心を真に行義たゞしければ、善を教めべき事かたし、といへるその理、聞えたり。反治のたとへ、よ
くかなへり。

とその発想を評価していた。何かにつけて『可笑記』の記述に難癖をつけてきた『可笑記評判』の中では印象深い。そして『可笑記』においてさらに続けられた油断懈怠の戒めの話について、了意は冷静にこの本反の話に繋がるものではない

と批判していた。これは真つ当な批判であり、そこから「意」が本反の話と確かに向かい合っていたことがわかる。

『浮世物語』において「意」が前述のような主人公を設定したのには、反治の期待があったからではないだろうか。唱導を効果的に行うためには、〈道・理〉を教条的に押しつけるよりも、反対の内容を投げかけてみて聞き手（読者）の反作用を待つという方法もまた選ぶべきという判断である。『攘夷記』のような形を取らずに物語を構想したことが先ずはその実践であり、さらには冒頭の設定によって主人公の利用価値を十分に確保していたところに工夫があった。つまり「進んで関心を示し話を聞いて」もらうためというような全体的な理由のみならず、「意」が懸念する人間（じんご）のさまざまなポイントに浮世房を据えてみることでよって直接的な教化を自論むことができたということである。『浮世物語』の中では反治という言葉は使われていないので、言葉自体を意識していたと見なす材料はないのだが、反治の発想を用いていたというに相應しいことは十分に確認できる。

飄太郎は、島原で全財産を使い果たした後、ある大名のところで歩若党（からわかどう）になる（巻第一の七）。ここで反治はさらにその特性を発揮する。

召しかかえられた主人公（この時の名は兵太郎）の仕事といえば、家臣からも農民からもとにかく税を取り立てるために知恵を出すことであった。藩財政の浮沈によっては無慈悲な重税の事態も現実にくぐってきたのだろうが、このような行政の実態を非難の対象とするには当然配慮が必要であった。そこで『浮世物語』の中では、重税に苦しむ家臣たちにとつての非難の対象としては、大名でも悪政そのものでもなく、重税を画策しながら大名の後ろ盾に安住している兵太郎を選ばせたのである。家臣たちの気持は、

「千人の指さす者は、病（やま)なくして死すといふ事あり。待ちてみよ、ほこらしき事はあるまじ」と、片津（かたづ)をのみて兵太郎をのろひ居る。

と表現されている。ここまで恨まれるのはよっぽど不名誉なことであり危険なことでもある。兵太郎がその役回りを引き受けたのであるが、重税を徴収する側の人間というのは現実世界に当然実在していたわけである。その彼らには重税の非を政道として説く言説よりも、他人事のようにつるし上げておきながら、恨みの対象は実は自分でもあり得ると気づかせ

ることの方がよっぽど効果的と考えたのではないだろうか。

谷脇理史氏『浮世物語』とカムフラージュ⁸⁾』は、仮名草子の中には、政治的な発言をする場合において、トラブルを未然に防ぐため、表現に配慮するものがあつたことを指摘し、さらにこの場面では、表現上の配慮のみならず、設定とハナシの筋そのもので現実批判をカムフラージュしていたとしてゐる。ところが本稿は、『浮世物語』の前半は批判といったものではなく、もっと接近して教化というところまでを企図していたと解釈しているため、設定による期待の比重はカムフラージュより、教化の効果にあつたのではないかと考える。同じカムフラージュにしても、政治的なものというより、教訓を教条的に見せずに、読まれやすく、そして受け入れられやすくするための方法上のものであつたということである。直接的に当局を非難する構図をとらずに、悪政の当事者たちに内省を促す。少なくとも教化のためのカムフラージュならば、確かに働いていた。つまり『浮世物語』の前半で行われていたのは、このように現実的な教化の実践だったのである。しかしながら、とかく『浮世物語』の教化は後半にあらわれるものと見なされ、前半は滑稽譚などの解釈がなされてきた傾向がある。それは『浮世物語』前半の分析の至らなさが導いた結果ではないだろうか。

『浮世物語』の分析は、『浮世』という言葉の持つイメージの広がり、そして蛭仙という終幕のために、観念的な言葉で語られることが多かつた。

巻一・巻二で無限に空間を移動する行為者であつた浮世房も、巻三に到ると大名家への定着を契機に“ことばの人”に変身する。この変身自体は、作者の夢を語つた『浮世物語』としては少しも不自然なことではない。ナンセンスをモチーフにして生きる浮世房も、センスの世界を批評する浮世房も、ともに作者の夢の自画像に他ならないからである。(中略)そして、まずその存在を否定され、次にことば(＝意識)を否定され、二重の意味で否定された浮世房が、夢の極致において蛭仙というかたちでこの世から消滅するのちまた、物語の当然の帰結であつた。(森耕一氏『浮世物語』の可能性——浮世房一代記の意味——)⁹⁾

注意しなければならないのは、浮世房の振る舞いは実に身近で現実的なものだつたということである。それは教化の及ぶ範囲というものを十分に意識して投げかけられたもので、決して夢でもなければナンセンスをモチーフにするものでも

なかつた。「浮世物語」は前半から後半へ向かつて書かれたものであり、前半から後半へ向かつて読まれるべきものであつた。末尾のイメージで前半の読みを規定することには疑念を禁じ得ない。

巻第一の政道批判は、続く巻第一の八「名馬の用にたたざる事」で終わっている。巻第三で再び別の主君に迎えられる。政道批判を展開しているために気づきにくいのだが、一度ここで政道批判は終わっていたことを認識しなければならぬ。続く巻第一の九「喧嘩して牢人しける事」においてある侍を怒らせてしまった主人公は、武家にもいられなくなり、僧侶になることにする。ここで浮世房という名を得ることになるのだが、この名は巻第一の二「浮世房なりたちの事」において「今はむかし、浮世房とて、浮きに浮いて飄金なる法師有りけり」と語り起こされたように、はじめから用意されていたものであつた。つまり「浮世物語」の主人公には浮世房として何らかの行動をとることが期待されていたのであり、ある大名の歩若党になつたのは、そこへ至るまでの道程だつたことになる。侍と喧嘩をしたから僧侶になつたのではなく、僧侶になるために侍と喧嘩をしたということである。もちろん作者は機を見ていた。つまり政道批判は一度は語り尽くされていたといえる。そうなれば、後に展開される政道批判は当初には予定されていなかったものであつたことになり、「浮世物語」はもつと短いハナシとして構想されていたことが想像できるのである。それが巻第五まで続くことになつたのは、それなりの理由が途中において生まれていたと見なすことが自然であり、前半と後半の様相の違いを、曖昧な観念語で有耶無耶にしてしまうことは不適切な処理として警戒しなければならなかつたのである。

四、唱導効果の後退とその契機

巻第三の十四「浮世房主君の御子息意見の事」は、浮世房が主君の子息の「悪行をいたす事かぎりなし」といった振る舞いを諫めるハナシである。浮世房は、唐代の狄仁傑は仁政を行つたがその死後に子息狄景暉が悪政を行つたために、狄仁傑までが人民に憎み嫌われるようになったという物語を「話材」として用いて唱導話を語るのであるが、例の子息はその戒めを受け入れることはない。このような教条的方法が人を導くことに実際上あまり効果を發揮しないことは容易に想像でき、無理のないハナシの運びとして納得できるものである。

それでは、このハナシの中における子息への唱導の効果ではなく、このハナシ自体が持ち得る読者への唱導の効果に着

目じた場合はどうなのだろうか。ここでの効果とは読者が唱導を我が身のこととして聞き入れる程度を指すが、このように唱導話らしく教条的に語られる限り、読者にしてもその内容と終始距離を保ったままとなる可能性もあり、こちらの効果にもやはり疑問が持たれてしまう。巻第一の七「歩若党になりし事」などでは、主人公の曲折した体験を〈自分の側〉のこととして実感する機会があるので、そこでの効果とは明らかかな差があるように思われる。

その後、例の子息が不機嫌になつてしまい罵り出すと、浮世房は自分の禿頭と源俊頼の歌とを掛け合わせた言葉で返答して笑わせる。このようなハナシが添えられて、「浮世房主君の御子息意見の事」は完成となる。狄仁傑の物語と言葉の掛け合わせという二つの〈話材〉を含んだ主君の子息に関するこのハナシ全体を一つの唱導話と見なしても、これでは、何らかの権力を持つ読者に仁政を促すというような効果よりも、不機嫌な人をなだめる技術を教える効果の方がむしろ大きいように思われる。登場人物の口から教条的に語られる内容と、登場人物が体験する事態とでは、読者にとつてどちらが心を接近させることになるかということに注目してみれば、せつかく巻第一で始めた主人公に負の体験をさせるという効果的な方法が、後半に行くに連れて失われてしまい、結局は〈話材〉の提供という意味ばかりになつてしまったことは唱導の後退といえよう。浅井了意はこのことをどのように認識していたのであろうか。

巻第三の七「鷹鳴の稲をくらふ難儀の事」で浮世房は、農民の損害を顧みることなく鷹狩り用の鷹鳴を大切にされた悪政の〈話材〉と、人民の生活を顧みながら鷹鳴を大切にされた仁政の〈話材〉を並べて唱導話を語る。すると主君は感服してその年の年貢率を低くし、数年来たまつていた未納分の年貢を免除したとしている。鷹狩りと悪政の関連は〈話材〉として既に『可笑記』巻第三の三十二に書かれていたので、現実問題としての了意の実感がここにあつたかどうかは疑わしい。しかしながらこの箇所について鈴木亨氏は次のように述べている。

……その批判精神は、社会悪そのものに対決しているだけでこの場合は充分であつた。なぜなら、浮世房の諫言を聴いた主君は、「大いに甘心ありて、その年の免ゆるく、年比の未進をゆるされたり」という、一時的にしろ有効な処置を講じたからである。こんな事は社会構造の非情さを知る者にとつては夢想に過ぎぬかも知れない。しかし為政者の有情を信じ、かつその権能を信ずる事が作者の立言の基礎になつて以上、それは現実的な夢であつた。¹⁰⁾

浮世房が語る唱導話を物語内の聞き手が了解したことを重要視しているわけであるが、もし本当にそこに作者の何らかの思いが反映されているのであれば、他のハナシもこのような結末に揃えられてよさそうなのである。ところが、先ほどの「浮世房主君の御子息意見の事」のように聞き手に反発された例もあり、また、巻第三の二「侍の善悪批判の事」のように賛否両論という反応もあった。しかし後半に行くに連れて最も多くなるのは物語内の聞き手の反応というものがそもそも記されなくなってしまう例である。やがては語り手の存在すら忘れられるものも登場し、唱導話は語られっぱなしとなってしまうている。これは了意自身が既にこの時点で、聞き手の反応など、つまりは浮世房を主人公とした物語部分の展開というものを重要視しなくなっていた、もしくは放棄していたということではないだろうか。

先ほど述べたが唱導の有効性ということでは、口で教条的に語られるものより、登場人物の体験を見せる方がよかったのである。巻第一でせっかくなような方法を始めていながら、後半に行くに連れて次第に「話材」の方が中心となり、浮世房を主人公とした物語としての展開が付け足しのようになってしまうていた。この変化を了意が予定していなかったとすれば、そのような事態はなぜ起こってしまったのか。

前半と後半の様相の変化については巻第二の九「後悔の事」を境界とする見方が一般的であろう。坂野玉穂氏は、

巻二一九「後悔の事」に到るまでの浮世房の行動には必ずしも賞賛に値しない面もある。また次章には、彼に遁世してなお博奕や傾城狂の癖があったことが記されている。そのために、この章にある「後悔」の効果が増少する傾向があるが、始めて自分に反省の目を向け、無駄に過した月日を後悔する。ここに浮世房の新しい姿勢を見ることができらるだろう。

と述べている。稿者はこれとは別のところに境界を見出しているのだが、それに触れる前にこの「後悔の事」について分析しなければならぬ。まず注意しておきたいのは「後悔の事」に続く巻第二の十「人に癖ある事」との関係である。ここでは、杜預・白樂天・慈鎮和尚の名を出して人には癖があるものというハナシを始め、「浮世房は遁世しけれども、猶博奕・傾城狂ひの癖あり」と、浮世房の人格をあらためて設定している。これはいかにも「後悔の事」に対する作者の応急の修正とみられるものである。つまり「人に癖ある事」には、「後悔」の「効果が減少」してしまうといった消極的な意味で

はなく、作者が必要とした積極的な役割があったと判断するべきではないだろうか。「後悔の事」で一度は狭められそうになった主人公の人格を解き放つことが目的であり、浮世房によって展開されていく物語としての可能性を守ろうとしたわけである。そうであるのなら作者はなぜ「後悔の事」で浮世房に後悔をさせてしまったのか。

〈話材〉に強く興味を持って、了意のことを考えれば、彼が語りたかったのは浮世房の行為ではなく、先ずは司馬温公「六悔の銘」などのハナシの方であったと見るべきだろう。「後悔」とは了意にとつて〈話材〉の素材の一つであった。「可笑記評判」巻第一の三「物ごと、後悔すべき事」ですでに「後悔」について説明し、『浮世物語』と同じように「六悔の銘」と井上小左衛門尉某「悔草」の名を出していたことがその証左となる。『浮世物語』においてその説明が少し詳しくなったということである。了意が特別に「後悔」に興味をもって、いたわけではない。『可笑記評判』巻第一の三にこれが書かれたのは当然、如儡子が『可笑記』巻第一の三番目で「後悔」について書いていたからである。唱導に相応しい素材であったというだけであろう。

了意は〈話材〉の素材として『浮世物語』に「後悔」を登場させたかった。そして浮世房の物語として関係づけるために浮世房に「後悔」をさせた。浮世房の「後悔」が物語の展開として画策されていたものであるのなら、その「後悔」は前章である巻第二の八「餅に噎せて金をやらざりける事」における浮世房の〈卑しさ〉を含んだものだったはずである。しかし「後悔の事」では一切そのことには触れていない。そもそもここでの「後悔」は人との関係を問うような社会的なものではなく、自己の生き方の目算といったものであった。つまり「後悔の事」は「餅に噎せて金をやらざりける事」を契機に書かれたものではなかった。そもそも物語の展開から現出したものではないので契機というものがなかったのである。

付け足して言えば、「餅に噎せて金をやらざりける事」も、そもそも主人公の〈卑しさ〉を訴えるためのものではなかった。了意の興味は〈ただ食い〉の〈話材〉を語ることの方だったのであり、浮世房はそれに利用されただけである。了意はこの章によって浮世房が「後悔」が必要なほど〈卑しさ〉を纏ってしまったなどとは思っていなかった。そのため「後悔の事」においてこのことは無視されていた。まとめればやはり、「後悔の事」は物語の展開上計算されて登場したものでなかつたということである。だからこそ前半と後半の様相の変化の境界は複雑な問題となる。

五、「鳩の戒の事」の失策

「後悔の事」はその後にこそ意味を持つようになった。当初から予定されていたものではなくても、了意はここで主人公に新たな一面を獲得させることができたことに気づいたのである。そして結果的に「後悔の事」は、『浮世物語』を長編にさせることに役立つことになった。

〈話材〉を語りたいという欲求はともかくとして、本来『浮世物語』は効果的な唱導という目的を持って書き起こされたものだったはずである。そのため反治を果たし得る特殊な主人公を設定して物語形式で語り始められていた。しかし、作者はある時からその方法を使いこなせなくなり、巻第二以降は主人公と唱導話との関係がまちまちになってしまったのである。それを解消するのが〈改心した〉主人公の口を用いて直接的に唱導を行うという方法である。唱導したいという欲求と〈話材〉を語りたいという欲求を満たすために、早速巻第二の末尾から巻第三の冒頭を用いて浮世房をある主君の御咄衆に設定している。「後悔の事」によつて可能となったのだが、前半に比べて安易な方法であったために、現代の読者からは不評となっている始末である。巻第一・二では躍動していた主人公が巻第三以降はつたりと動かなくなってしまう、巻第四・五もそのまま変化無く続いていく。

このように前半と後半には語られ方の明らかな差異があるのだが、その境界として「後悔の事」とは別に注目しなければならぬ箇所がある。巻第二以降は主人公と唱導話との関係が揺れ始めるのだが、その理由をもう一度述べれば、『浮世物語』が特殊な主人公を設定して語り始めていながら、作者はある時からその方法を使いこなせなくなったということである。実はその契機は巻第二の「鳩の戒の事」にあったのではないかと考えられるので、経緯を説明する。

巻第一で主人公は、先ず博奕と傾城に溺れる者の愚かさを体現し、破産すれば大名の歩若兎として悪政の先陣となり、喧嘩をして武家にもいられなくなれば僧侶になった。しかし歌舞伎に夢中になってはしゃぐと、他の客に「これなる房主は出家にも似合はぬ」と叱られて喧嘩になり、忽ち出家したことを悔やむようになる。実際に「心より起こらぬ道心」で僧衣を着ている者が当時巷間にも見られたと想像でき、浮世房はそれを代表してみせたわけである。このように了意は現実社会で目にするのできる様々な人物の批判されるべき振る舞いを告発し、反治を行うために浮世房にそれらを体現させてきた。

同じことをさまざまな職業設定で続けていくために、ここでまた作者は主人公を次の職業につかせなければならなくなる。そこで思いついたのが鳩の戒の概念であった。

今はむかし、浮世房、「さて此上はいかにすべき」と案じけるが、急度思ひ出だしたる事有り。京にも田舎にも鳩の戒といふ者有りて、万の事の間を合せ、さながら其根に入りたることはひとつもなければ、又知らぬこともなし。あれ是に成り替へく嘘をつきて世を渡る。

これによって浮世房は医師と大工を経験してみることになるのだが、すぐ失敗して逃げ出してしまふ。ところが浮世房が最終的に御咄衆になる前についた職業は、実のところこの二つだけであった。せっかく様々な職業を経験できる契機として鳩の戒という概念を出していたことを考えると拍子抜けする少なさである。この理由を探ると見えてくるものがある。鳩の戒は二つの語源説から二つの意味を有しているのだが、了意はその語源の一つを知らなかった可能性があり、これが重大な影響を与えることになったと考えられる。様々な職業や物事の始まりについて記されている『人倫重宝記』（元禄九年刊）が紹介する鳩の戒の語源は、「熊野の新宮本宮の事をかたりては、鳩の飼料をしんぜられよとて、錢をとりしより鳩の飼といふ名はつけたる」ということであり、それは詐欺師としての「鳩の飼」であった。ところが『浮世物語』の「鳩の戒の事」ではこの語源及び「飼」の用字に触れてはいない。知っていることなら全てを語り尽くしたいはずの了意の性格を想起すれば、この部分に関する知識の欠落の可能性を否定することはできない。しかしながら先ほどの引用箇所「あれ是に成り替へく嘘をつきて世を渡る」からわかる通り、意味だけならばこの方向のものも押さえていたのである。これは「京にも田舎にも鳩の戒といふ者有りて」という状況から、当時の共通概念として漠然と理解していたということなのであろう。様々な職業につきながら詐欺行為を働いていく（鳩のかい）の概念は、批判されるべき所業を主人公に体現させることによって次々と告発し、反治していく『浮世物語』の方法に相応しいものだった。そのためここでの概念を打ち出して説明を始めたわけであるが、この意味に対応する語源を知らなかったために、了意なりにそれを用意する必要があったのである。本文には次のように書かれている。

秋になれば、鳩すなはち鷹たかとなりて、鷹たかのまねするものなれば、時にしたがひ折ひによりて、いろくになりかはり、世を渡る業わざをいたし、人をへつらひだます者を、鳩はとの戒いとは申すとなり。

了意の記した『新語園』(天和二年刊)の「斑鳩ハシヤウ并鳩メイヤウ」の項に「仲春鷹化ハシヤウ為鳩メイヤウ仲秋鳩復化ハシヤウ為鷹タカ」とあるので、「秋になれば、鳩すなはち鷹となりて」が荒唐な表現ではなく中国故事を根拠としていることは理解できる。しかし、それが「人をへつらひだます者」になって、鳩の戒という(戒め)となることは、向に理解できない。例の意味に対応する語源を知らなかったため、了意なりにそれを捻出した際の不備といえよう。ここでもう一つの方の語源と意味に触れてみる。

鳩は巢をとて美しく丈夫に作るという。鳩はその作り方を見習おうとするのだが、すぐにわかった気になって最後まで見届けずに自分の巢を作ってしまう。木の枝に芝折を四・五本渡して葉を敷いただけの巢に卵を産むが、卵は芝折の間から落ちてしまう。これによって、何かの方法を真まに會得くわいとくしていないのに知ったような気になっている者を鳩の戒という。これが「鳩の戒の事」で中心的に記された語源である。

つまり、確かな知識や技術を持たずに振る舞うことの危険性を(戒め)ていることになるのだが、おかしなことに、様々な職業を体験しようとしている浮世房自身が心配されているようなものになってしまっているのである。こうなるかどうか(鳩のかい)の概念を出した当初の目的、つまりは悪徳の告発による反治というものからは離れてしまっている。

最初の引用に沿って整理してみれば、了意は、鳩の戒の「万よろの事ことの間まを合せ、さながら其根そのねに入りたることはひとつもなければ、又知らぬこともなし」という意味とその語源については知っていたのだが、「あれ是こゝに成り替へく嘘うそをつきて世を渡る」については漠然と意味を知っていただけであつたということになるのである。つまり了意は巷間の理解のままに、浮世房を詐欺師として位置づけられるようにと(鳩のかい)に言及したのだが、(鳩の戒)に限られた知識の範囲内で彼の特性ともいえる語り癖を発揮してしまつたことが災いし、精一杯に語源を語れば語るほどに当初の思わくからは離れるようになり、ここからの浮世房は、失敗が予定された笑話の主人公として限定されることになってしまつたというわけである。

早速巻第二の二「薬ちがひをせし事」で浮世房は医師となつて癩病かさねと掲誼かていを間違える失態を犯す。そして粉薬を与えてみれば患者の様子がおかしくなつたので逃げ出す。ここでは「醒睡笑」にも見られる言葉の混同を語るだけであり、主人

公に何かを体現させるほどの役割を与えることはできていない。続く巻第二の三「大坂くんだり付大工意見物がたりの事」では浮世房は大工の弟子となるのだが、そこでの行為といえば柱を削った時に手元が狂って足首を切ってしまったことだけであった。すぐに辞めようとする浮世房に親方は鍛錬の重要性を語りかける。

鳩の戒の概念によって浮世房は、結局失敗することが予定されてしまっていたので彼自身の振る舞いから何かを告発するほどの働きは期待できなくなっていたのである。この時に残されていた唱導の方法は、誰かの口をもつてそれを直接的に語るということだけであった。

六、おわりに

本稿では『浮世物語』の前後半において見られる様相の変化について、作者の当初の目論見と技術的な限界に着目して考察してきた。作者は社会変革を期しての社会批判・政治批判を安全で効果的に行うために、矮小滑稽に設定された主人公を利用していたのだが、やがてその方法に行き詰まった。仕方なく主人公の口を使って批判を語るという安易な方法を選択することになるのだが、そのきっかけは巻第二の「鳩の戒の事」における作者の知識の偏りに認めることができるということである。

本稿は、語り方の変化を「浮世」のイメージで漠然と処理する論考への批判であって、もちろん『浮世物語』を批判するものではない。作者の当初の目論見と実行の差異、施される修正や読者の受け取り方の全てを含めた結果によって文学史は作られるものであり、『浮世物語』はその好例だったと考える。

「後悔の事」が結果的に『浮世物語』を長編にすることに役立ったと前述したが、「鳩の戒の事」は読者に新しい物語を体験させることに寄与した。語り口の変化によって存在感が後退することになって一人の主人公のもとに最後まで語りきった『浮世物語』は、主人公ではなく世の中を描く物語の存在を読者に実感させた。これを浮世草子出現の準備と見なすことができるわけだが、そこで強調したいのは、このような物語が〈成立〉したという漠然とした認識よりも、このような物語を〈作成〉したという認識の重要性である。時代状況ばかりでなく個人の事情がこのように筆致に影響していたということである。

【注】『浮世物語』本文の引用は、谷脇理史校注『仮名草子集』（新編日本古典文学全集六十四、平成十一年、小学館）に拠っている。

- (1) 野田寿雄「『浮世物語』覚書」（『国語国文研究』第二十四号、昭和二十八年二月、北海道大学国文学会）。
- (2) 巻第一の七「歩音覚になりし事」において、主人公がある大名のもとに職を求め、親、心得、随分の臆病者にて侍べれども、算用方はよくいたすと申されしかば」と、付き添ってきた親が口添えをしている。しかし、巻第一の二「浮世房なりたちの事」において、主人公の親は死去していた。この矛盾について谷脇理史氏は前記『仮名草子集』の二〇五頁の頭注で、作者の長編的構想力の欠陥にもよるが、場あたりのいい加減な記述が当時の小説類に多いのは「慰み草」と意識された小説の位置とも関連する。
- (3) 前記『仮名草子集』の九二頁の頭注。
- (4) 常吉幸子「丁意における（批判）の特性——『浮世物語』への視角における「可笑記評判」論——」（『国文学研究ノート』十八、昭和六十年九月、神戸大学文学部）。
- (5) 引用は、朝倉治彦・深沢秋男編『仮名草子集 第十四巻』（平成五年、東京堂出版）の翻刻を基に、漢字・句読点等を適宜加減して読みやすくしたもの。
- (6) 引用は、朝倉治彦・深沢秋男編『仮名草子集 第十五巻』（平成六年、東京堂出版）の翻刻を基に、漢字・句読点等を適宜加減して読みやすくしたもの。
- (7) 本稿では唱導（誦）という言葉を用いて、仏道への教化に限らずに使用している。その語りが導く内容としては、選択すべき生き方・実践すべき道を訴える教訓と、物事の由来やことわりなどの知識を授ける啓蒙とがあるといえるのだが、先ずこれらを統合して「道・理」と呼ぶ。そしてその「道・理」を導くために語られる唱導話にはその材料として構成に取り込まれるハナシがあることに注目する。それはある事態に對しての着眼点を示すものであったり、古事としての物語を参考として挙げるものであったりするのだが、これを「話材」と呼ぶ。詳しくは拙稿「『浮世物語』における「話材」の独立と浮世観」（『日本語と日本文学』第四十号、平成十七年二月、筑波大学国語国文学会）を参照していただきたい。
- (8) 谷脇理史「『浮世物語』とカムフラージュ」（『文学研究科紀要 文学・芸術編』第四十輯、平成七年二月、早稲田大学大学院文学研究科）。
- (9) 森耕一「『浮世物語』の可能性——浮世房一代記の意味——」（『近世芸芸 研究と評論』第十五号、昭和五十三年十月、早稲田大学文学部）。
- (10) 鈴木亨「『仮名草子』における教訓性と文芸性——『浮世物語』の構成をめぐる——」（『島根大学論集（人文科学）』第十一号、昭和三十三年三月、島根大学）。

- (11) 坂野玉穂『浮世物語』の「浮世」について（『香椎瀉』第二十八号、昭和五十八年三月、福岡女子大学国文学会）。
- (12) 引用は、『職人尽絵詞／人倫重宝記』（江戸科学古典叢書三十九、昭和五十七年、恒和出版）所収の国立国会図書館所蔵本の影印より謄点を補ったもの。
- (13) 『新語園』（昭和五十六年、古典文庫）より。